

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00706

研究課題名（和文）講義の談話の展開構造と講義ノートの分析に基づく理解過程の研究

研究課題名（英文）Research on the comprehension process based on the development structure of lecture discourse and analysis of lecture notes

研究代表者

渡辺 文生（Watanabe, Fumio）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00212324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語母語話者、日本語学習者を被調査者とした講義の談話の理解調査をもとに、ノートの筆記過程、特に、メタ言語表現に関連する内容の筆記過程から観察される講義理解のためのストラテジー、および、講義後の理解テストの結果との相関について分析・考察を行った。その結果、評価型総括のメタ言語表現が、その総括された内容より先行して現れる方がメタ言語表現に関するノートの記述が多く、理解テストの得点も高かったこと、および、この談話パターンにおいては、評価の対象となる内容に関するノート記述が、メタ言語表現に関する記述に先行して行われる傾向が強かったことなどが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、講義の理解過程に着目した先行研究の蓄積が少ない中で、ノートの筆記過程を分析対象に加えた研究を行ったということが挙げられる。社会的意義としては、本研究の分析結果が、大学の留学生を対象とした講義の聴解指導に役立てることができるといえることである。講義におけるノートテイキングを向上させるポイントとしては、メタ言語表現を意識すること、および、語の反復やキーワードを把握する重要性が指摘された。

研究成果の概要（英文）：In this study, based on a survey of lecture comprehension by Japanese native speakers and L2 learners, I analyzed the strategies for understanding lectures observed from the note-taking process, especially the process of taking notes on content related to metalinguistic expressions, and the correlation with the results of a comprehension test. As a result, I found that when the "evaluative" type of metalinguistic expressions appeared before the evaluated content, the participants took more notes on metalinguistic expressions and had higher scores on the comprehension test, and that in this case, there was a strong tendency that the participants took notes on the evaluated content before their notes on metalinguistic expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：講義の談話 ノート筆記過程 メタ言語表現 談話の理解

1. 研究開始当初の背景

日本国内の大学における日本語教育の課題の一つとして、日本語による講義の理解をどのように支援するかということが挙げられる。大学の講義を対象とした受講者の理解のあり方についての先行研究としては、共同研究による成果をまとめた西條(2007)、佐久間(2010, 2014, 2015)、石黒(2014)などがある。これらの研究成果の中には、講義におけるメタ言語表現の機能に関する研究(中居・寅丸 2010、李 2014)、ノートテイキングと講義理解に関する研究(小沼・石黒 2007)が含まれ、それらの研究から、講義を理解しノートを取る手がかりの一つとしてメタ言語表現が重要な機能を果たしていることが示唆されている。

渡辺(2017)では、学部留学生による講義の談話の聴解に関して、講義ノートにおけるメタ言語表現に関する情報の記述、および、トピック・センテンスの内容の記述の有無と、理解テストの結果との関連について分析し、メタ言語表現に関する情報の記述と理解テストの結果との相関は、問いの難易度によって影響を受けていたこと、難易度の高い問いにおいては、メタ言語表現に関する情報がノートに記載されているかどうか、トピック・センテンスの叙述内容の記載の有無よりも高い相関を示したことを報告した。

また、毛利・古川・中井(2017)は、母語話者と日本語学習者を対象にノートの記述と理解テストの結果との関連を調査し、母語話者はメタ言語表現の機能に関連した語句を重要箇所と判断し、必要な情報の取り込みを行っているのに対し、日本語学習者は母語話者と比べてそれらの重要箇所に関するノートへの記録が少なく、理解にも結びついていなかったと報告している。

以上の先行研究を背景として、講義理解の手がかりとなる表現の種類とその分析資料としてのノートの重要性が明らかになってきたが、長時間の談話である講義の理解のあり方を捉えるためには、談話の流れに沿った理解過程の分析が必要だという課題が生じてくる。講義理解のあり方を解明するには、講義後の理解の状態を分析するだけではなく、講義の時間の流れに沿って理解のプロセスを分析する必要があると考えられるからである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語母語話者、日本語学習者を被調査者とした講義の談話の理解調査をもとに、ノートの筆記過程、特に、メタ言語表現に関連する内容の筆記過程から観察される講義理解のためのストラテジー、および、講義後の理解テストの結果との相関について分析・考察を行うことである。講義の談話の素材には、ラジオの講義を用い、日本語母語話者とN1~N2レベルの日本語学習者を対象に行った理解調査のデータを用いた。

3. 研究の方法

本研究の調査の概要は以下の通りである。被調査者のうち、日本語母語話者(以下NS)は日本人大学生6名で、日本語学習者(以下NNS)は日本の大学に留学しているN1~N2レベルの留学生15名である。講義素材には、NHKカルチャーラジオから抽出した講義の談話を用いた。

調査期間：2018年2月および7月、2019年2月、2020年2月、2021年4月

被調査者：日本語母語話者 6名 日本人大学生

日本語学習者 15名 N1~N2レベルの留学生

(母語：中国語 10名、ベトナム語・タイ語・英語・フランス語・ロシア語 各1名)

調査の素材：NHKカルチャーラジオの講義

『植物の不思議なパワー』および『グリム童話の深層をよむ』というシリーズの講義から5種類のテーマに関する講義

調査の手順

1. 講義のシリーズ名および理解に必要な語彙リストの提示
2. 講義のリスニングおよびノートテイキング(1回目)
3. 講義の内容に関する理解テストへの解答(1回目)
4. 講義のリスニングおよびノートテイキング(2回目)
5. 講義の内容に関する理解テストへの解答(2回目)

調査の手順としては、最初に何についての講義であるか、そして、講義の理解に最低限必要と思われる語彙リストを提示した。その際、質問の筆記タスクを著しく容易にするような語彙は提示しないように配慮した。講義のリスニング中は、後のタスクのためにノートを取るようにと指示した。ノートを取りながらのリスニングは2回行い、それぞれの回の後に、ノートを参照しながら理解テストが行われた。1回目の理解テストは、短時間で回答できるよう、単語だけで回答するような簡単な設問のみで構成されていた。

4. 研究成果

(1)メタ言語表現に関するノート記述およびその筆記過程と理解テストの結果との相関

この分析では、調査データの中から分析対象となる談話パターンを2つ取り上げた。1つ目は、「これから言うことの項目を示す」という機能を持つ〈サブポイント提示〉のメタ言語表現(西條 1999)である。たとえば、「植物は、三大栄養素っていうのを供給してくれます。よく知られてるように、炭水化物そしてタンパク質そして脂質っていうのが三大栄養素です。」という発話において、「三大栄養素」が〈サブポイント提示〉のメタ言語表現であり、「炭水化物」「タンパク質」「脂質」が列挙されたその項目ということになる。理解テストは、「列挙された項目は何か?」という質問に対して正しく答えられるかを問うものである。2つ目の談話パターンは、「今言っていることについての評価を述べる」〈評価型総括〉のメタ言語表現に関わるものである。たとえば、「つまり嫌な結婚を強要されることによって、まあ主人公が、人生の大ピンチに陥るといって、これが大事なんですね。」という発話において、「これが大事なんですね」という部分が〈評価型総括〉のメタ言語表現であり、「嫌な結婚の強要により主人公が大ピンチに陥る」ことがその内容ということになる。理解テストは、「大事な点とは何か?」という設問に対してその内容を答えられるかどうかを問うものである。

〈サブポイント提示〉のメタ言語表現に関する調査結果から、理解テストの得点の高い日本語学習者は、〈サブポイント提示〉に伴い列挙された項目のうちの2番目以降の項目を早くノートに書いていた。1番目に挙げられる項目については、ほとんどの被調査者が同時に書き始めていたが、その情報をノートに書くのを早めに切り上げて次に移っていった者の方がより成績が良い傾向があった。また、手がかりだけ書いて他の項目の筆記に移り、後で残りを書くという筆記ストラテジーが、母語話者・日本語学習者双方に見られた。

〈評価型総括〉のメタ言語表現に関する分析においては、「大事である」という〈評価型総括〉のメタ言語表現が、大事だと述べる内容に先行して現れる先行型なのか、それとも、後に現れる後続型なのかという違いを取り上げた。〈評価型総括〉のメタ言語表現が先行型の場合、日本語学習者の調査結果においては、メタ言語表現に関する情報の記述と理解テストの得点には正の相関が見られた。また、発話の中で述べられる順番とは逆に、評価の対象となる内容に関するノート記述が、メタ言語表現に関する情報の記述に先行して行われる傾向が強かった。その一方で後続型の場合、日本語学習者のノートにメタ言語表現の情報が記述されにくく、先行型で見られたような理解テストの得点との正の相関が見られなかった。

(2)メタ言語表現とトピック・センテンスに関するノート筆記過程から観察される講義理解ストラテジー

この分析では、話段に設定されたトピックに対する叙述をまとめている文をトピック・センテンスとみなし、〈サブポイント提示〉のメタ言語表現が話段のトピックを主題として提示し、その内容が叙述になっている例を取り上げた。たとえば、グリム童話の「白雪姫」に関する講義談話の白雪姫の特徴を説明する話段における「第1は非常な美人であることです。」という発話において、「第1(の特徴)」が話段のトピックであり、「非常な美人である」ことがその叙述ということになる。理解テストは、話段のトピックである「白雪姫の第1の特徴とは何か?」という設問に対して、その叙述を答えとして要求する形式を取った。

分析に取り上げた「白雪姫」に関する講義談話は、白雪姫の3つの特徴を順番に説明するというものであった。「でー白雪姫の特徴は3つあると思うんです。えーそれを順番にお話ししていきたいと思いますが」という発話を聞いた段階で、日本語母語話者、日本語学習者ともに半数以上の被調査者が、主要登場人物の一人としてノートに書いた「白雪姫」との記述に関連づけてカッコや枝分かれの線を引いたり、「3」などと〈サブポイント提示〉の情報を見出しとして記入して、3つの特徴を筆記する準備を始めていた。

第1の特徴に関する話段のトピック・センテンスは「第1は非常な美人であることです。」という発話で、「第1」というメタ言語表現が先行して現れる型であったが、日本語母語話者の全員、そして、日本語学習者の8割以上の被調査者がこの発話をきっかけにして「美人」あるいは「美しい」とノートに記入し、「非常な／に」という程度副詞の情報について最初から「美人」との情報と一緒に記入したのは一部の日本語学習者だけ(17%)であった。日本語学習者、日本語母語話者ともに、まずは短時間で記入できるキーワードを中心にノートを取り、周辺の情報については、あとで余裕ができたとき、あるいは、気がついたときに記入するといったストラテジーを用いていることが観察された。

第2の特徴に関する話段のトピック・センテンスは「外観だけでなく、心も美しい、これが、白雪姫の第2の特徴です。」という発話で、メタ言語表現が後続して現れる型であった。先行型であった第1の特徴の場合と比べて、後続型である第2の特徴ではノート記述に対して不利な影響があるかと予測されたが、当該の話段においてはトピック・センテンスに先行する発話において第2の特徴への話題の転換が示唆されていることと、「心も美しい」ということが白雪姫の重要な属性としてすでに提示されていることから、日本語学習者の被調査者にとっても、メタ言語表現後続型であることがもたらす不利な影響が見られず、被調査者の全員がこのトピック・センテンスまでの段階で、「心も美しい」という第2の特徴の内容をノートに書いていた、あるいは、書くことに着手していた。

第3の特徴に関する話段のトピック・センテンスは「お妃とは違い、白雪姫は誰からも愛さ

れます、これが、白雪姫の第3の特徴です。」という発話で、メタ言語表現が後続して現れる型であった。しかも、調査に用いた講義談話においては、第2の特徴について述べられたすぐ後に第3の特徴に関する話段が現れるのではなく、第3の特徴への話題の移行が先延ばしにされていた。被調査者にとっては、そろそろ第3の特徴への言及があるのではないかという心構えが十分にない状態で、このトピック・センテンスを聞くことになったため、日本語学習者の被調査者のうち、このトピック・センテンスをきっかけに「誰からも愛される」とノートに書いたのは1名しかいなかった。日本語母語話者は、全員このトピック・センテンスをきっかけに「誰からも愛される」とノートに書いていることから、話題の転換を示唆する手がかりが乏しい文脈では、メタ言語表現が先行するか後続するかという位置的な違いが、日本語学習者の談話理解に対して影響を与えることが明らかになった。

〈引用文献〉

- 石黒圭（編）（2014）『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』（平成23～25年度科学研究費補助金 基盤研究（B）研究代表者：佐久間まゆみ）
- 小沼喜好・石黒圭（2007）「受講ノートANにおける講義Aの原話の理解」西條美紀（2007）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』（平成16～18年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（C））218-225
- 西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 西條美紀（編）（2007）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』（平成16～18年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（C）研究代表者：西條美紀）
- 佐久間まゆみ（編）（2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 佐久間まゆみ（編）（2014）『大学学部留学生のための講義の談話に関する研究』（平成23～25年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究（B）研究代表者：佐久間まゆみ）
- 佐久間まゆみ（編）（2015）『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』（2014年度特定課題研究助成費（A）（一般助成）研究成果報告書 研究代表者：佐久間まゆみ）早稲田大学
- 中井陽子・寅丸真澄（2010）「講義の談話のメタ言語表現」佐久間まゆみ（編）『講義の談話の表現と理解』153-168 くろしお出版
- 毛利貴美・古川智樹・中井好男（2017）「メタ言語表現の機能は講義理解の手がかりとなり得るか」『2017年度日本語教育学会秋季大会予稿集』260-265
- 李婷（2014）「講義の談話におけるメタ言語表現の働き」石黒圭（編）『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』44-59
- 渡辺文生（2017）「ノートをとおして分析する日本語学習者による講義の談話の理解」『2017 CAJLE Annual Conference Proceedings』279-288カナダ日本語教育振興会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺文生	4. 巻 -
2. 論文標題 講義ノートの分析に基づく日本語母語話者と学習者による講義理解ストラテジーの対照研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021 CAJLE Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 222-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺文生	4. 巻 -
2. 論文標題 ノートの筆記過程をもとに分析する受講者の理解ストラテジー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019 CAJLE Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 341 ~ 348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺文生	4. 巻 -
2. 論文標題 ノートの筆記過程をもとに分析する講義の談話の理解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018 CAJLE Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 307 ~ 316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 渡辺文生
2. 発表標題 講義ノートの分析に基づく日本語母語話者と学習者による講義理解ストラテジーの対照研究
3. 学会等名 2021 CAJLE Annual Conference（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺文生
2. 発表標題 ノートの筆記過程をもとに分析する受講者の理解ストラテジー
3. 学会等名 2019 CAJLE Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺文生
2. 発表標題 ノートの筆記過程をもとに分析する講義の談話の理解
3. 学会等名 2018 CAJLE Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺文生
2. 発表標題 メタ言語表現はノート記述のきっかけになっているか - 日本語母語話者と学習者のケーススタディー
3. 学会等名 第8回談話分析コロキウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------